

障害学生支援に関する授業担当教員アンケート (平成 29 年度)

1. 実施の目的

今後の障害学生支援の充実や方向性を検討するため、障害のある学生が受講する授業の担当教員へアンケート調査を実施し、障害学生支援センターで提供している合理的配慮や取り組みの有効性について検討した。

2. 方法

平成 29 年度前期・後期において本学で開講された授業のうち、障害学生が受講した授業の担当教員 90 名（常勤 55 名、非常勤 35 名）を対象に、2018 年 1～2 月にかけて、郵送法によるアンケート調査を実施した。そのうち、42 名から回答が得られた（回収率 46.7%）。なお回答者は常勤教員 16 名（45.5%）、非常勤講師 17 名（48.6%）であった。

3. 結果および概要

各質問項目の結果は以下の通りである。

問① 担当した授業（障害のある学生が受講した授業）について

担当した授業において障害のある学生の障害種（複数回答）を尋ねたところ、視覚障害 40 件、聴覚障害 64 件、肢体不自由 3 件、病弱・虚弱 6 件、発達障害 4 件、精神障害 1 名、不明 1 件であった。本年度は視覚障害学生および聴覚障害学生に対する支援件数が 104 件と、全体の 87%を占めた（図 4-1）。

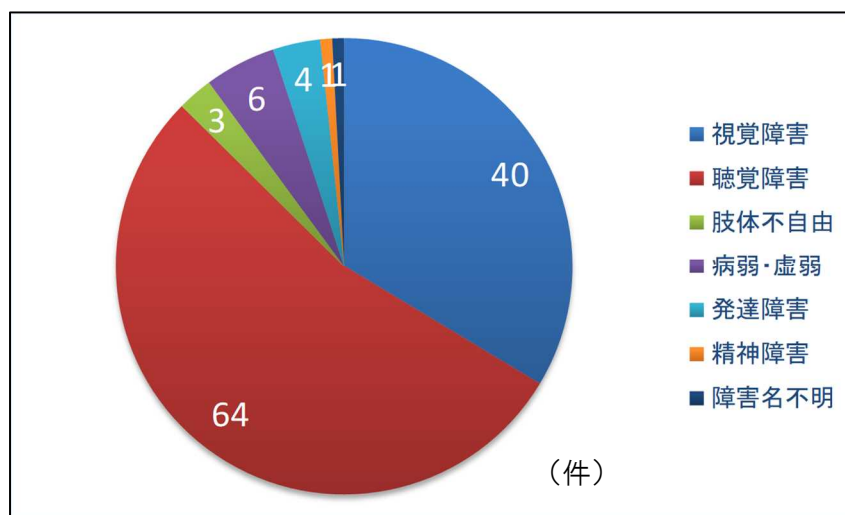


図 4-1 支援件数

また、授業を担当している障害学生へ行った配慮について、選択するように求めた結果を図 4-2～図 4-4 に示す。

視覚障害学生への配慮として「教材の拡大（18 件）」が最も多く、「教室内座席配慮（7 件）」が続いた。

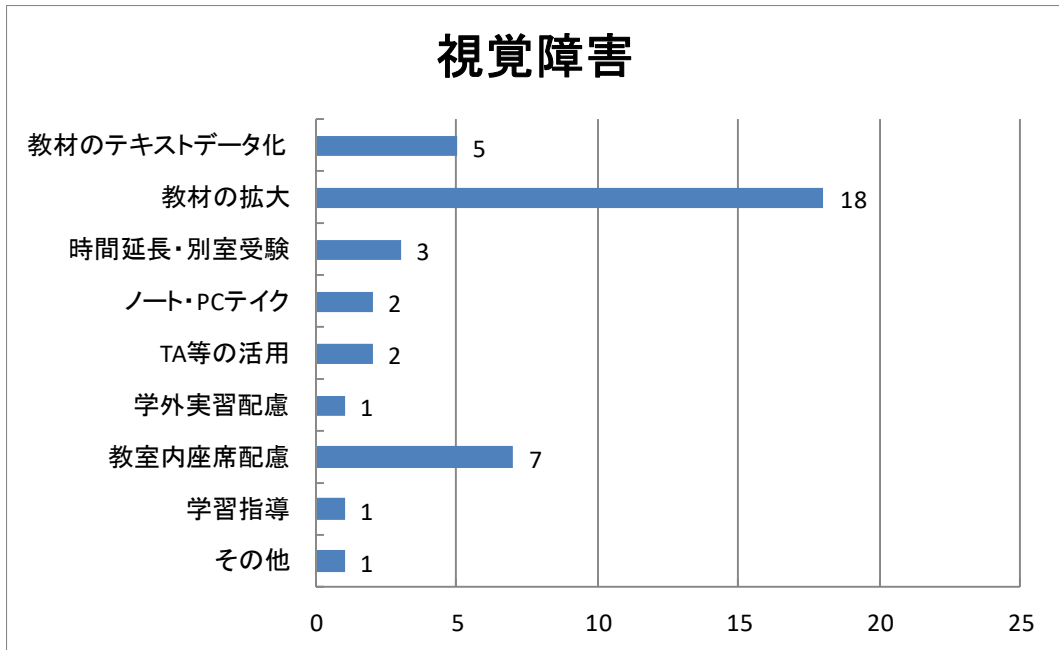


図 4-2 視覚障害学生に行った配慮

聴覚障害学生への配慮では、「ノート・PCテイク（25件）」が最も多く、続いて「FM補聴器/マイク使用（13件）」であった。

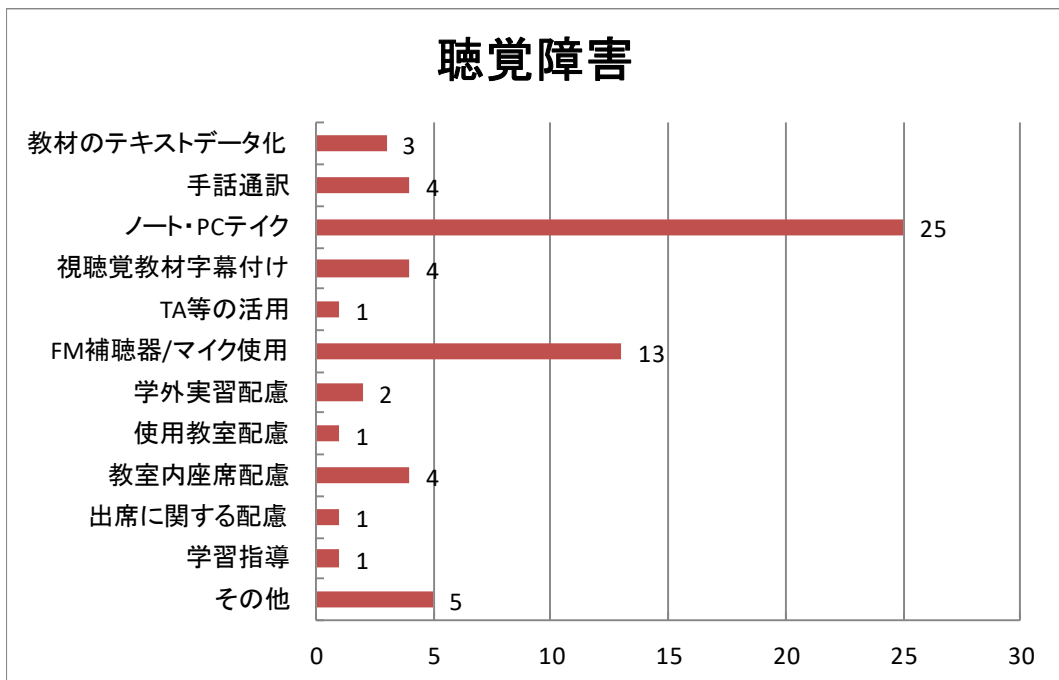


図 4-3 聴覚障害学生に行った配慮

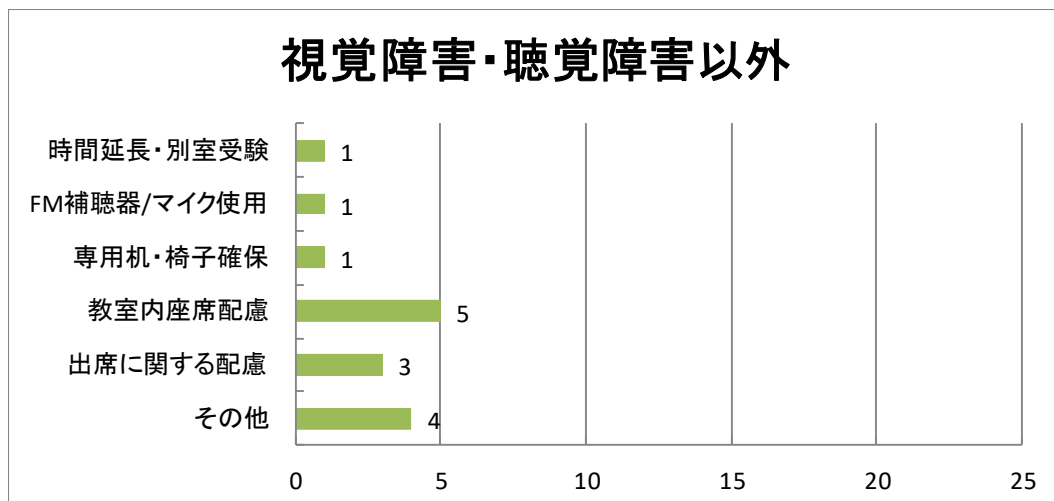


図 4-4 視覚障害・聴覚障害以外の学生に行った配慮

なお、すべての障害種における配慮の中で、「ノート・PC テイク」が昨年同様、本学において最も件数が多かった。昨年度と比較すると、「教室内座席配慮」はその件数を大きく伸ばした。学生の障害種が多様化する中で、必要な配慮も多様化していると考えられる。

問② 障害学生支援センターが提供している支援（パソコンテイク、字幕挿入、情報提供等）は適切であったと思いますか。

上記について尋ねたところ、図 4-5 のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が 30 名、「少しそう思う」が 7 名で、すべての回答者から肯定的な回答が得られ、障害学生支援センターで行っている配慮に一定の評価が得られたと考えられる。

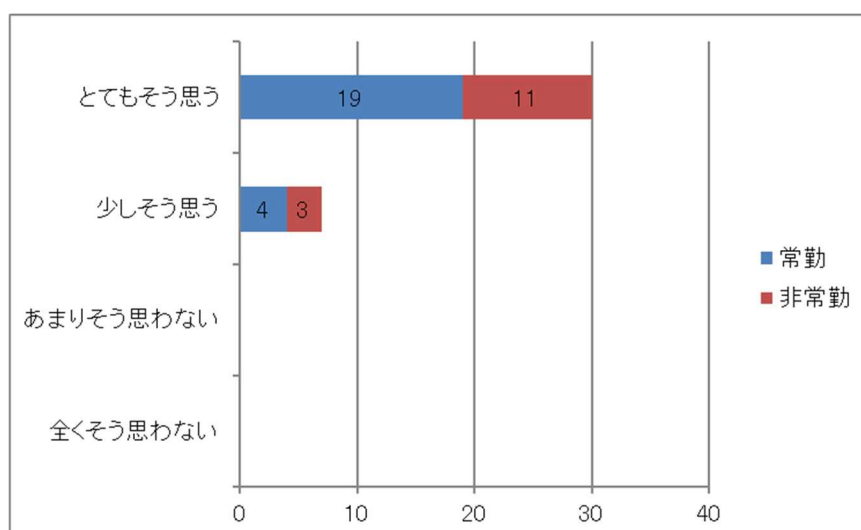


図 4-5 障害学生支援センターが提供した支援は適切だったと思うか

問③ 障害のある学生への配慮は、授業の達成目標という観点から見て十分だと思いますか

か。

上記について尋ねたところ、図 4-6 のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が 22 名と最も多く、次いで「少しそう思う」が 11 名であった。これらの結果から、障害学生支援センターで提供する配慮は、授業の目標を達成するために十分なものであったと考えられる。その一方で、自由記述として、「場合によっては観点のブレが生じる可能性があると感じた。」、「実技指導時は、移動しながら話すことが多いため、うまく詳細が伝わらないことがあった。」とあるように、評価の観点や具体的な場面での配慮の方法などについて、授業担当教員に対して詳細に説明していく必要性が示唆された。

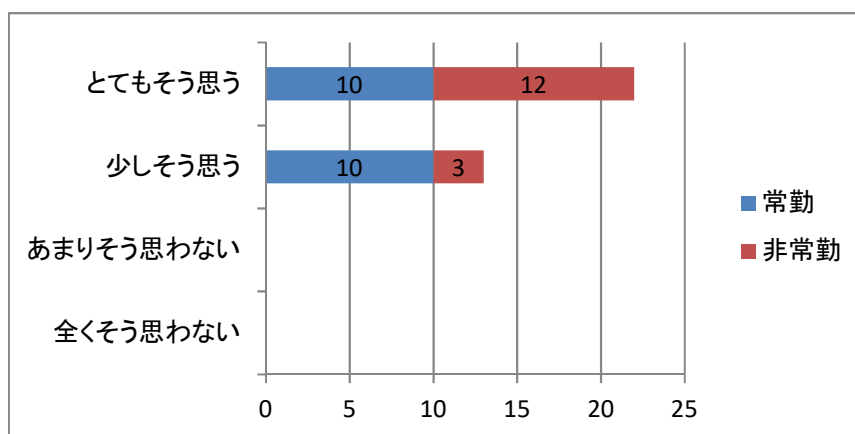


図 4-6 障害学生への支援は授業の達成目標という観点から見て十分だと思うか

問④ 障害のある学生に授業を行うことで、授業のユニバーサル化が進んだと思いますか。

上記について尋ねたところ、図 4-7 のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が 6 名、「少しそう思う」が 13 名であった一方、「あまりそう思わない」と回答した人数は 8 名であり、「あまりそう思わない」と回答した割合が昨年同様 3 割程度であった。

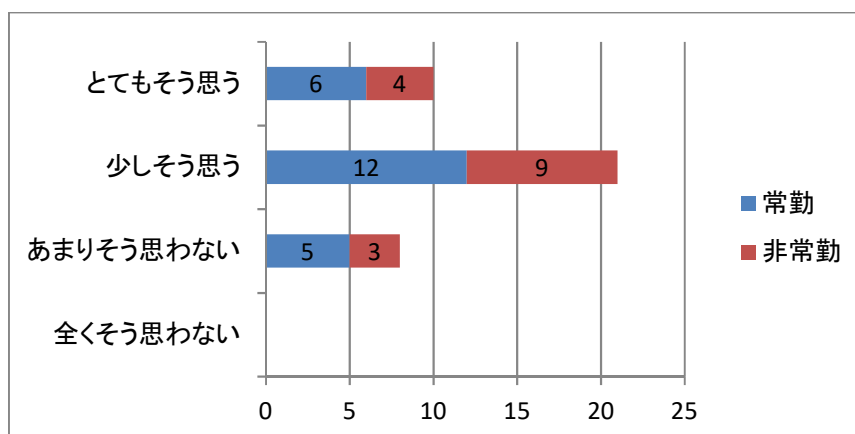


図 4-7 障害学生に授業を行うことで、授業のユニバーサル化が進んだと思うか

問⑤ 障害のある学生へ授業を行っていくうえで FD が必要だと思いますか。

上記について尋ねたところ、図 4-8 のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が 19 名、「少しそう思う」が 13 名であり、授業担当教員は FD の実施を求めていることが明らかとなり、次年度以降、FD 研修などの機会を充実させる必要性が示された。

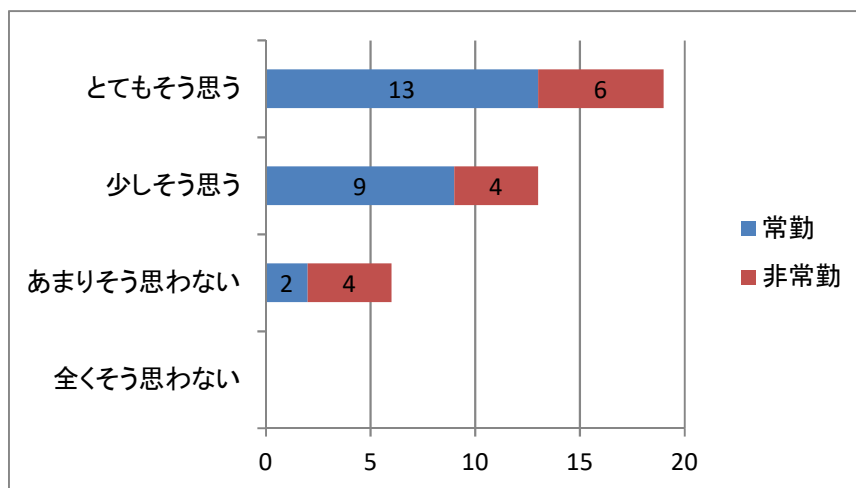


図 4-9 障害学生に授業を行ううえで、FD が必要だと思うか

問⑥ 障害のある学生への支援を行うにあたってうまくいかなかった授業はありますか。

上記について尋ねたところ、図 4-10 のような結果が得られた。回答者全体でみると「毎回あった」が 3 名、「しばしばあった」が 2 名、「たまにあった」が 18 名、「全くなかった」が 16 名であった。授業を行うにあたってうまくいかないことがほとんどなかったと考えている授業担当教員がいる一方、ほぼ毎回うまくいかなかったと感じている教員も一定数存在した。このことから、障害学生支援センターと授業担当教員が密に連携を取りながら、配慮内容を検討していく必要性が示唆された。

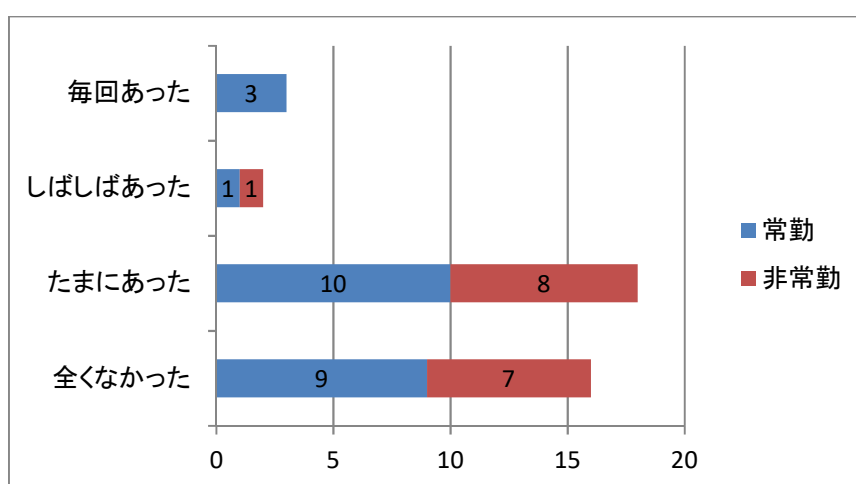
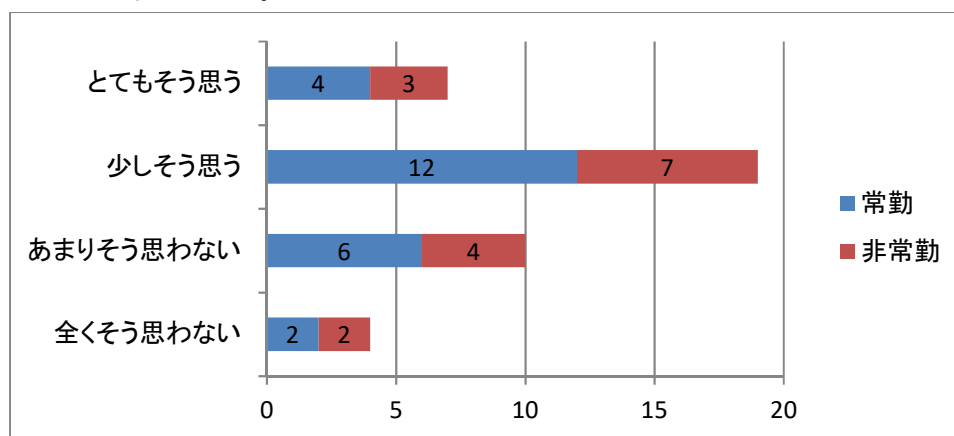


図 4-10 障害学生の支援を行うにあたって、うまくいかなかった授業があったか

問⑦ 障害のある学生が自分の必要な配慮事項について、能動的に先生方に伝えたと思い

ますか。

上記の問いに対して、図 4-11 のような結果が得られた。「とてもそう思う」が 7 名、「少しそう思う」が 24 名、「あまりそう思わない」が 10 名、「全くそう思わない」が 4 名であった。昨年度の調査では、「あまりそう思わない」の回答が最も多く、また「合理的配慮を要する学生がどの学生なのかわからなかった」という回答があったことを受けて、学生に対して授業の初回に配慮依頼文書を手渡すよう指導を行った。そのために肯定的な評価が増えたものと考えられる。



問 4-11 障害学生が自分に必要な配慮事項を能動的に伝えていたか

問⑧ 障害学生支援センターより送付した、障害のある学生への配慮依頼文書は十分に理解されましたか。

上記について尋ねたところ、図 4-12 のような結果が得られた。「とてもそう思う」と回答した教員が 26 名、「少しそう思う」が 14 名であり、配慮依頼文書はおおむね理解されていた。しかし配慮依頼文書だけでなく、障害学生支援センターで発行しているミニガイドを参照していただくなど、文書による配慮依頼だけでなく、必要に応じて追加の説明を行う必要があると考えられる。

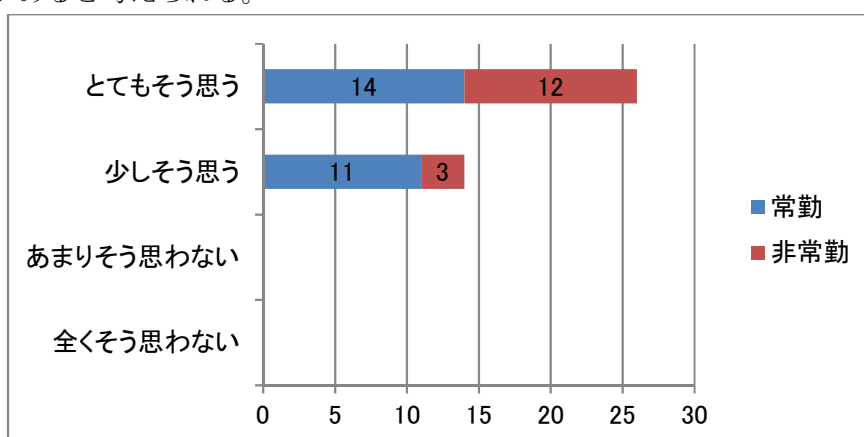


図 4-12 配慮依頼文書は十分に理解できたか

問⑨ 障害のある学生への支援を行うにあたって、工夫した点について記述してください。

上記について、障害種別にまとめたものを表 4-1 に示す。「初回と 2 回目の授業後に本人に内容と授業の理解度について話し合いの機会を持った」、「分かりにくいことがないか不安がないか質問（声かけ）をするようにした」、「個別に話をし、何か問題があれば気軽に相談に来よう声かけした」、「授業内容や方法について要望がないか質問した」というように、授業の前後で当該学生に声かけを行い、学生の要望に応じて授業改善を行っていることがうかがわれた。

表 4-1 支援を行うにあたって工夫した点

視覚障害	
資料・教材について	<ul style="list-style-type: none"> ・プリント類をA4からA3へ拡大し、毎回の授業前に渡していた。 ・配布資料の拡大コピー ・弱視の学生が読みやすい字体やコントラストを心掛けた。 ・絵本の読み聞かせの際に、絵を書画カメラを使って拡大した。 ・資料を作る時に、内容が多くなりすぎないようにした。
授業の進め方について	<ul style="list-style-type: none"> ・モニターや板書に近づいてノートをとることを許可した。 ・板書を見やすいように工夫して書いた。 ・学生を一番前列の中央に座席配慮した。 ・授業内で学生がパワーポイントを使用して発表する際に、支援学生に配慮するよう指導した。（アニメーションの切替スピードなど） ・初回と2回目の授業後に本人に内容と授業の理解度について話し合いの機会をもった。 ・板書の文字を可能な限り大きくし、判読しやすくようにした。
レポートについて	<ul style="list-style-type: none"> ・課題のデータでの提出を許可した。
聴覚障害	
話し方について	<ul style="list-style-type: none"> ・多少ゆっくり話すように気を付けた。 ・単文でゆっくり話すよう心掛けている。 ・ゆっくりはっきり話すように配慮した。 ・実技の授業のため、個別評価・指導の際にゆっくりと話す・口元が見えるようにする、後で筆記して確認するなど理解の度合いを確認できるようにした。 ・ノートテイクを考慮し、できるだけ簡潔に整理して話すよう心掛けた。 字幕のスライドを用いたりゆっくりと話した。
資料・教材について	<ul style="list-style-type: none"> ・プリント、スライドを活用して授業を行った。 ・課題や授業の内容、目標などをまとめた書類を作成しグループ毎に配布、ノートテイクの学生に追加資料として配布した。 ・実技中心の授業で内容の手順などに関しては資料を用意している。
授業の進め方について	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆっくり話すだけでなく、反応を確認しながら授業を行った。 ・FM補聴器/マイクが授業の途中で反応を確認するよう努めた。 ・テキストに書かれた箇所を扱う場合は頁や行を改めて伝え、ノートテイクをしなくて済むようにした。 ・理解できるまで十分な時間を取っていた。 ・他の学生が発表する時は、板書するようにした。時間の変更、レポート提出なども板書するようにした。
発達障害	
授業の進め方について	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中、情報保障が行いやすいようにPPなど望ましい提示に際し、情報量が過度に多くならないようにするとともに提示する時間を十分に確保するようにした。 ・板書を見やすいように工夫して書いた。実技であったので手順などを分かりやすいように目の前でやって見せるなどした。授業の前後に分かりにくいことがないか不安がないか質問（声掛け）するようにした。
共通	
授業の進め方について	<ul style="list-style-type: none"> ・配布資料を詳しくして流れをつかみやすくし、口頭だけの説明をできるだけ避けた。 ・個別に話をし、何か問題があれば気軽に相談に来よう声掛けした。 ・授業内容や方法について要望がないか質問した。 ・障害のある学生の様子に常に注意して授業を進めた。

問⑩ 障害のある学生への支援を行うにあたって不安な点について記述してください。

上記について尋ねた結果を障害種別にまとめた（表 4-2）。支援を行うにあたって不安な点として、障害学生に支援を行うことで授業の進度に遅れが出てくるのではないかと、適切

に配慮を行っているのか、授業内容を理解できているのかなどが挙げられた。障害特性によって授業担当教員とコミュニケーションをとることが難しい場合や時間的な制約によって授業の前後で話し合う時間を取ることが難しい場合も多い。そのため、障害学生支援センターで障害学生の授業中の困難感などを聞き取り授業担当教員へ伝え返すような取り組みを定期的に行う必要性が推察された。

表 4-2 支援を行うにあたって不安だった点

聴覚障害
<ul style="list-style-type: none"> ・実技を伴う演習の際は、安全面の配慮が難しかった。 ・これまで感覚的に話していた内容を文字化してもわかるように気をつけることは、自分の思考の整理にも有効であったが、学生と対話したり指導したりする量は確実に減少した。それが他の学生の質の低下につながらないか不安だった。 ・説明が早口で情報量も多いため、ノートテイクに負担をかけてしまう。安易に「ここ」とか「これ」とか指示語を使ってしまいがちだった。
発達障害
<ul style="list-style-type: none"> ・言葉(教員の発言)による情報量については調整することが難しいと感じた。 ・当該学生一人にだけスライド資料や朱入りのワークシートを配布するタイミングや渡し方に迷うことがあった。
共通
<ul style="list-style-type: none"> ・障害の種類や程度によっては、配慮をしたい気持ちはあっても対応しきれないことも出てくると思った。 ・自分が適切さを欠いているのににも関わらず学生は遠慮して困っていることを言い出せないのではないか思った。 ・不足している点に気付いていない可能性があること。 ・今のところ問題は起きていないが今後どのような配慮が必要となるかがわからないので毎回うまく対応しているか確信を持ちづらい。 ・集中講義だったので、対象学生の理解度を図りにくかった。 ・支援の効果があつたかどうか不安である。 ・要望を伝えるのが苦手な学生、質問するのが苦手な学生がいた場合、どうしても対応が不十分になるため、この点に不安がある。 ・障害のある学生の能力に考慮し、普通の学生たちの進度に遅れが出るのではないかと不安がある。

本アンケート調査の結果をふまえて、次年度以降は教職員に対するFD研修会などの機会を充実や授業担当教員との密な連携を図っていきたいと考える。また、大学における授業中の支援にとどまらず、教育実習といった学外実習における支援や発達障害・精神障害といった多様なニーズのある学生への支援がより一層求められるため、大学内の関係部署だけでなく、学外との連携も行っていきたいと考える。